

## 日本におけるロッシーニ受容の歴史（貴重な音源・映像付き） 水谷彰良

### 内容告知：

日本で初めてロッシーニのアリアが歌われたのは、明治維新から8年後の1875（明治8）年9月でした。オペラの上演は1917年（大正6年）11月に始まりますが、最初の49年間は《セビーリヤの理髪師》だけが演目とされました。この講演では我が国のロッシーニ受容の歴史を明らかにするとともに、大正時代の公演チラシやプログラムの現物を提示し、さらにSPレコードの音源、1976年の東京室内歌劇場《アルジェのイタリア女》秘蔵録音、1981年ミラノ・スカラ座来日公演《小荘厳ミサ曲》の映像、1983年二期会《セビーリヤの理髪師》地方公演の秘蔵録音その他、ここでしか聴く・観ることのできない貴重な録音と映像も紹介します。併せて協会事業としての上演記録の編纂とその方法論を明らかにし、会員の皆様への協力を呼びかけます。（講師・記）

### はじめに：この講演の目的と方法

大正末期までの日本におけるオペラ史に関する最も重要にして情報の完備された文献は、増井敬二氏による次の2著である——『日本のオペラ 明治から大正へ』（民音音楽資料館、1984年）、『日本オペラ史 ～1952』（昭和音楽大学オペラ研究所編。水曜社、2003年）。そこには日本における最初のオペラ上演、明治に始まるさまざまな歌劇団の来日に関する情報が網羅されているが、日本におけるロッシーニ受容というテーマに即して言えば、明治期の演奏についての情報はきわめて乏しく、明治8年、明治14年、明治32年の合計3例が挙げられているにすぎない（別紙資料：「明治期の公開演奏会におけるロッシーニとヴェルディ作品の演奏」参照）。

この講演の第一部では、さまざまな文献から私が拾い上げた明治期のロッシーニ作品演奏の記録をヴェルディ演奏と共に一覧表として示し、明治時代のイタリア・オペラ受容の諸側面を解説する。大正期については昭和8年までを射程に、「浅草オペラのロッシーニ・オペラ上演」「海外重要歌手の来日演奏会におけるロッシーニ作品の演奏」「海外の歌劇団の来日におけるロッシーニ・オペラ上演」を概説し、現物資料（楽譜・プログラム・解説書）、SP録音、関連映像を用いて独自の視点で解説する。

この講演の第二部では日本におけるロッシーニ上演の諸相を歴史的見地で概説し（邦題の変遷、「日本初演」のカテゴリー、上演の特殊性など）、日本におけるさまざまな演奏や上演を、録音と映像によって紹介する。

講演の最後に日本ロッシーニ協会の事業としてのロッシーニ上演データベース構築の必要性と意義について説明し、協力者を募って組織的な取り組みの開始としたい。

## I. 前史と明治期におけるオペラ受容の概略

### 前史：日本における最初のオペラ上演

文政3年9月（1820年10月）、長崎の出島でオランダ人が上演した歌入り芝居《二人猟師乳汁売娘》を上演、これが日本で最初のオペラ上演と推測される（該当作品はE.ドゥーニのオペラ・コミック《二人の猟師と牛乳売り娘》1763年パリ初演）。

その後、資料で確認できるオペラの演奏は明治3年（1870年）9月28日の横浜中華劇場での居留民アマチュアによるサリヴァン《ボックスとボックス》が最初となる。

### 日本で最初のイタリア・オペラの楽曲演奏は明治8年（1875年） 別紙資料参照

その後、1903年まで重要なイタリア人のオペラ歌手は来日していない。

### 日本人には受け容れがたいオペラ歌唱

明治12年（1879年）年9月、ヴァーノン歌劇団は来日したハールマン夫妻（妻はソプラノ、夫はピアノ）を交えて新富座でオペラの公演を行ったが、大失敗を喫した。原因はオペラ歌手の発声を日本の観衆が「まるで鶏が絞め殺されるよう」として受け付けなかったことにあり、JWM9月7日付の記事——「日本人大衆の鑑賞心は、西欧の聴衆と全く正反対であることを示している。ちよびりした仕出し役をやらせてもらっている若い団員の声や動きに対し、息詰まるような沈黙を以て心をうっとりさせ聞き入るのに対し、プリマドンナの最も感動的な音符のところ、ドッと大きな笑い声が起こるのだ」。

### 日本人による最初のオペラ上演（明治36年7月23日《オルフォイス》）

### バンドマン喜歌劇団の来日と浅草オペラへの影響

明治後期に来日したオペラ団はバンドマン喜歌劇団ほか二つのみ。重要なのは明治39年（1906年）から15年間に12回来日したバンドマン喜歌劇団だが、興業場所は横浜と神戸が中心で演目は英米のミュージカル・コメディだった（イタリア・オペラの上演なし）。

### 明治末期までの Verdi と Rossini の日本語表記 別紙資料参照

Verdi：ヴェルヂー、ヴェルヂー、ヴェルジー、ヴェルデー、ウエルデー、ジェー、ウキルデー、ベルヂー、ジー、ヴァデ、ヴェルデ、ベルデ、ウエルデイ、ヴェルディーなど

註：「ヴェルディ」はおそらく明治40年代から。

Rossini：ロジニー、ロシニー、ロッシニ、ロヒー、ロシーニ、ロススイニ、ロッシニー、ロツシニーなど

註：「ロッシーニ」は遅くとも明治39年に現れたが、ロシーニ、ロッシニーが多く使われた。

## II. 大正から昭和 20 年までのロッシェニ上演の諸相

### ローヤル館と最初のロッシェニ上演

日本で最初のロッシェニ上演、それが 1917 年（大正 6 年）11 月 13 日に赤坂のローヤル館で上演された《シキルリアの理髪師》もしくは《シキルリアの理髪師》である（訳詞上演）。ローヤル館は、帝国劇場歌劇部の指導者に求められて 1912 年（大正元年）に来日したイタリア人バレエ振付師ジョヴァンニ・ヴィットーリオ・ロージ（Giovanni Vittorio Rosi, 1867-?）が 1916 年（大正 5 年）5 月に帝国劇場との契約を解消され、資財を投じて設立した劇場で、「大正 5 年 10 月 1 日に、赤坂紀尾井町の映画館万才館を大改装して」開館し、「場内に外国式の飲食の設備を設け」ていたが、当時の法令で劇場新設が困難なことから、「寄席として許可を取ったため、オペレッタの前に記述とか講談のようなものを加えなければならなかった」。それでも「オーケストラは 20 名以上いて帝劇を上回り」「オペレッタの名作を小林愛雄の訳詞、斉藤佳三の美術でほぼ原曲どおりに、1 日から 25 日まで続演して、あとは稽古という良心的な興行」であった（増井敬二『浅草オペラ物語』音楽現代社、1990 年、68 頁。一部表記を変更して引用）。

日本で「ロッシェニ」「ローシ」と表記されたロージは、このローヤル館で 1916 年 10 月から 1918 年 2 月まで 1 年 5 ヶ月間にさまざまなオペラを上演し、《セビーリヤの理髪師》以外にオッフェンバック《天国と地獄》《美しいエレヌ》《ボッカチョ》《ブン大将 [ジェロルスティン大公妃殿下]》、ヴェルディ《椿姫》のほか、原語上演によるマスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》を行った。

### 浅草オペラ時代の興行と《セビーリヤの理髪師》上演

ロージが提供した楽譜によると思われる《セビーリヤの理髪師》は、翌 1918 年（大正 7 年）を皮切りに、いわゆる「浅草オペラ」のレパートリーとなる。観音劇場（東京歌劇座）は同年 4 月 24 日からこのオペラを上演、駒形劇場は翌 1919 年（大正 8 年）1 月 24 日から《熊野》ほかと一緒に演目となり、4 月 30 日から金竜館の七声歌劇団による上演も始まった。しかし、七声歌劇団は中核メンバーの清水夫妻、田谷力三、安藤文子らが新星歌舞劇団に移籍したため弱体化し、同年 10 月末から金竜歌劇団と合同して根岸歌劇団（発足時の名称は根岸喜歌劇団）と称して活動すると、1920 年（大正 9 年）1 月 31 日から《セビーリヤの理髪師》を上演した。

一方、大正 8 年の 5 月に誕生した新星歌舞劇団は、清水金太郎夫妻、田谷力三、安藤文子らの移籍で水準を上げ、四大都市を巡演して「名実共に日本一の歌劇団」となり、1920 年（大正 9 年）3 月 13 日から《セビーリヤの理髪師》を上演した。その新星歌舞劇団は松竹と関係を持っていたが、金竜館の引き抜きで全員が根岸歌劇団に移籍して同年 8 月末に消滅し、「根岸大歌劇団（根岸歌劇団）」が誕生した。以後、浅草オペラは金竜館の根岸歌劇団の独壇場となり、大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災までの 3 年間の黄金時代を築き上げる。

この根岸歌劇団は、1920 年（大正 9 年）11 月 18 日（初日～同月 28 日）に《セヴキラの理髪師》、翌 1921 年（大正 10 年）8 月 2 日（初日～同月 11 日）に《バルビエ》の一節、10 月 21 日（初日～11 月 2 日）に《セヴキラの理髪師》、続く 1922 年（大正 11 年）6 月 28 日（初日～7 月 11 日）に《セヴキラの理髪師》、翌 1923 年（大正 12 年）5 月 31 日（初日～6 月 12 日）に《セヴィラの理髪師》を上演している（根岸歌劇団の演目と題名表記は増井敬二、前記書に基づく）。

浅草オペラ時代の興行は作品の単独上演ではなく、金竜館では芝居やヴォードヴィルなどと共に通例 5～6 演目が、昼の部と夜の部に分けて 1 日 2 回興行されていた。それぞれの部は正味 6 時間で、午前 10 時過ぎから夜の 11 時くらいまで約 12 時間、ほぼ通しで客の入れ替えなしに上演が続いた。オーケストラの規模に関する証言に「楽員が 7 人くらいだった」というものがあるが、「5～6 名から 15 名程度」と幅があり、編成はヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバス、クラリネット、ピアノに若干の金管楽器も加わったようだ。音楽はピアノ譜から楽団の編成に合わせて編成され、「耳に親しい歌だけを適当に集めて編曲するのが通常のスタイル」であった（増井敬二）。しかし、浅草オペラは大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災によって壊滅的打撃を受け、その短い歴史に幕を下ろした。

### 第 1 回露西亜大歌劇の来日（1919 [大正 8] 年 9 月 1 日～10 月 9 日。ロッシェニは含まず）

上演作品は 10 演目。ヴェルディ：リゴレット（本格日本初演）、椿姫（本格日本初演）、アイダ（日本初演）。グノー：ファウスト（日本初演）。ビゼー：カルメン。ドリーブ：ラクメ（日本初演）。プッチーニ：トスカ（本格日本初演）。マスカーニ：カヴァレリア・ルスティカーナ。レオンカヴァッロ：道化師（日本初演。カヴァレリア～と二本立て）。ムソルグスキー：ボリス・ゴドゥノフ（日本初演） 註：全 41 公演のうちヴェルディは 15 回。

### 第 2 回露西亜大歌劇の来日と、最初の本格的ロッシェニ上演

1921（大正 10）年、第 2 回露西亜大歌劇が来日（9 月 1 日～11 月 19 日。神戸、大阪、京都、東京、横浜、名古屋で合計 67 公演。《セビーリヤの理髪師》は 9 月 23 日の帝国劇場の昼公演と 10 月 13 日の有楽座の合計 2 回）。これがわが国における本格的なロッシェニ上演の最初で、メンバーは、ソプラノ 4、アルト 3、テノール 4、バリトン 5、バス 4 の合計 20 人から成り、基本的にロシア語で歌われた。

上演作品はバレエ 1 を含め 17 演目。ロッシェニ：セビーリヤの理髪師（本格日本初演）。ヴェルディ：リゴレット、トロヴァトーレ（本格日本初演?）、椿姫、アイダ。グノー：ファウスト、ロミオとジュリエット（本格日本初演）。ビゼー：カルメン。トマ：ミニョン（日本初演）。マスネ：タイス（日本初演）。ダルゴムイスキー：ルサルカ（日本初演）。チャイコフスキー：スペードの女王（日本初演）、エウゲニ・オネーギン（日本初演）。プッチーニ：ボエーム（日本初演）、蝶々夫人（本格日本初演）。レオンカヴァッロ：道化師（バレエ《月下の愛》と二本立て）。67 公演のうちヴェルディは 15 回。

### カーピイ太利大歌劇の来日と《セビーリヤの理髪師》の原語日本初演

1923 年（大正 12 年）年、第 1 回カーピイ太利大歌劇が来日（1 月 26 日～2 月 24 日。東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸）。上演作品は 14 演目。ロッシェニ：セビーリヤの理髪師。ベッリーニ：ノルマ（日本初演）。ドニゼッティ：ルチア（日本初演）。ヴェルディ：リゴレット、トロヴァトーレ、椿姫、アイダ。グノー：ファウスト。ビゼー：カルメン。プッチーニ：ボエーム、トスカ、蝶々夫人。マスカーニ：カヴァレリア・ルスティカーナ。レオンカヴァッロ：道化師（カヴァレリア～と二本立て）

30 公演のうちヴェルディは 9 回。ベルカント物は《セビーリヤの理髪師》のほか、ベッリーニ《ノルマ》とドニゼッティ《ルチア》の原語日本初演が行われる。但し、《セビーリヤの理髪師》は 2 月 4 日の帝国劇場昼公演 1 回のみ。

なお、同歌劇団は 1925 年（大正 14 年）の第 2 回来日に《セビーリヤの理髪師》を 3 回（3 月 8 日と 15 日の帝国劇場昼公演、21 日の大阪宝塚中劇場）、翌 1926 年（大正 15 年）の第 3 回来日に 1 回上演した（3 月 21 日帝国劇場昼公演）。1927 年（昭和 2 年）の第 4 回来日では《セビーリヤの理髪師》のほかベッリーニ《夢遊病者 [夢遊病の女]》を原語日本初演し、1929 年（昭和 4 年）の第 5 回来日、1930 年（昭和 5 年）の第 6 回来日でも《セビーリヤの理髪師》を上演している。但し、この第 6 回は団員多数のパスポート切れで当初予定を大幅に減らし、歌劇団は同年解散に至った。

### アメリタ・ガッリニクルチの来日

1929 年（昭和 4 年）4 月、アメリタ・ガッリニクルチ（Amelita Galli-Curci, 1882-1963）が来日し、帝国劇場で演奏会を開く。これが世界的プリマ・ドンナによる日本初リサイタルとなる。

### 昭和6年から敗戦までの主なロッシーニ上演

満州事変の起きた昭和6年(1931年)はオペラや音楽会が入り込んでいたが、4月にはトーティ・ダル・モンテ(Toti Dal Monte, 1893-1975)が来日して演奏会を開く。5月28日には報知講堂で東京オペラ・コミック劇場の第1回公演として《セビーリヤの理髪師》を上演。6月10日には清水金太郎・静子夫妻の東京歌劇座が《セビーリヤの理髪師》を上演。

昭和8年(1933年)にはサン・カルロ大歌劇が来日し、《セビーリヤの理髪師》を含む12演目を上演したが、全体に評価が低く、以後1956年の第1回NHKイタリア歌劇団まで外来歌劇団は途絶する。

昭和9年(1934年)6月1日、築地小劇場で日本楽劇協会と金曜会が《セヴィルの理髪師》を上演。

[昭和10年(1935年)6月、ガッリニクルチ再来日]

昭和12年(1937年)秋に三浦環歌劇学校で《セヴィラの理髪師》を上演。

昭和13年(1938年)11月18日、日比谷公会堂の阿南忍第1回発表会の第2部で《セヴィラの理髪師》を三浦環訳詞で上演。この公演は三浦環が演出し、みづからバルトロを歌った(!)。

戦時中の昭和18年(1943年)5月26~29日に藤原歌劇団が弘田龍太郎《西浦の神》と《セヴィラの理髪師》を併演。ロジーナは高柳二葉と大谷潤子のダブル、アルマヴィーヴァ伯爵は藤原義江がシングルで歌った(グルリット指揮。レチタティーヴォ・セッコを使わず台詞で全体運び、ナンバーも慣習的な省略のまま)。これは藤原歌劇団の創立10周年記念公演であったが、《西浦の神》が不評で経済的に大打撃を蒙った。

### III. 戦後のロッシーニ上演(略述)

戦後初のロッシーニ上演は昭和23年(1948年)3月、藤原歌劇団が帝国劇場で行った《セヴィラの理髪師》。以後、昭和42年(1967年)までは《セビーリヤの理髪師》のみが諸団体によって上演された。昭和28年(1953年)3月の藤原歌劇団創立20周年記念特別公演《セヴィラの理髪師》など特筆すべき公演もあるが、本日は詳細を省略し、次に1967年以降の主な日本初演を挙げておく(訳詞と原語の区別なく、管弦楽伴奏による主な作品の日本初演のみを参考までに挙げる)。

1967年、東京藝術大学(第13回藝大オペラ公演)による《アルジェリアのイタリア人[アルジェのイタリア女]》

1968年、二期会による《シンデレラ[ラ・チェネレントラ]》 註:ロッシーニ没後100周年記念。ここでロッシーニ三大ブッフアの本邦初演が完結。

1970年、NHK招聘ローマ室内歌劇団来日による《婚約手形[結婚手形]》

1971年、東京室内歌劇場による《ブルスキーノ君[ブルスキーノ氏]》 註:メノッティ《アマールと夜の訪問者》と併演。

1976年、東京オペラ・プロデュースによる《オリバー伯爵》

1981年、東京室内歌劇場による《イタリアのトルコ人》

1983年、藤沢市民オペラによる《ウィリアム・テル》

1989年、東京オペラ・プロデュースによる《オテッロ》

1989年、ウィーン国立歌劇場来日公演での《ランスへの旅》

1992年、東京の夏音楽祭92における《なりゆき泥棒》

2000年、新国立劇場小劇場オペラによる《幸せな間違い》

2003年、トリエステ・オペラ来日による《タンクレーディ》

2005年、東京オペラ・プロデュースによる《とてつもない誤解[ひどい誤解]》

2008年、藤原歌劇団による《どろぼうかささぎ[泥棒かささぎ]》、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル来日による《マホメット2世[マオメット2世]》

### 本日の視聴ならびに提示資料

#### ◎浅草オペラのイメージ

★浅草オペラに関する資料映像より 2004年1月29日NHK放送録画より 2:47

★映画『浅草の灯』1937年(昭和12年)松竹より 2:30

★セノオ楽譜(妹尾幸陽が明治43年発売開始)のロッシーニ「ロジナの歌」第5版、大正13年刊(初版は大正6年)の提示と説明

★ルイーザ・テトラツィーニ(1871-1940)による「美しい光が」の録音(1910年[明治43年]録音)4:12

#### ◎大正8年~昭和8年の来日歌劇団と来日歌手、原信子と藤原義江による歌唱(昭和10年まで)

★1923年(大正12年)第1回カービイ太利大歌劇来日の宣伝チラシの現物提示と説明

★1926年(大正15年)第3回カービイ太利大歌劇来日公演で帝劇が発行した『筋書』現物の提示と、作品解説文の紹介

★1929年(昭和4年)アメリカ・ガッリニクルチ来日演奏会(告別演奏会のプログラム現物を提示)

ガッリニクルチによるハインリヒ・ブロッホ《主題と変奏》(《セヴィルの床屋》中の音楽練習曲)及び「今の歌声」1917年(大正6年)録音 4:12/4:26

★1931年(昭和6年)トーティ・ダル・モンテ来日演奏会(チラシ=曲目表の現物を提示)。5回の異なるプログラムで多数の曲を歌った(ロッシーニ「今の歌声」「ラ・ダンツァ」含む)。

★オマケ:ロシア語のロッシーニ歌唱「空はほほえみ」歌:イワン・コズロフスキー(1954年録音。驚異の3オクターヴ!) 3:40

★1934年(昭和9年)1月25日 原信子帰朝演奏会(プログラムと半券を提示)。ロッシーニの録音が残っていないので、この演奏会の最後に歌ったヴェルディ「ああ、そは彼の人か」(原語歌唱、同年録音) 3:03

★藤原義江による「ナポリのタランテラ(ロッシーニ「ラ・ダンツァ」)」 1935年(昭和10年)録音 2:42

#### ◎戦後日本のロッシーニ上演とその演奏より(映像と録音)

★1953年3月、藤原歌劇団創立20周年記念特別公演《セヴィラの理髪師》(プログラム現物を提示)

★1976年3月東京室内歌劇場《アルジェのイタリア女》(東京、第一生命ホール。指揮:小松一彦、演出:三谷礼二)の総稽古の私的録音より。 19:02

- ★1981年、ミラノ・スカラ座初来日でのロッシェニ《小ミサ・ソレムニス》（1981年10月1日 東京郵便貯金ホール、NHK放送録画より）指揮：ロマーノ・ガンドルフィ指揮 独唱：ヨゼッラ・リージ（S）、ラクエル・ピエロッティ（Ms）、パオロ・バルパチーニ（T）、フェッルッチョ・フルラネット（B）←32歳！ 17:55
- ★1983年、二期会《セビリアの理髪師》地方公演の秘蔵録音より
- ★2000年、日本ロッシェニ協会による《ランスへの旅》邦人初演の映像より。

## IV. 日本の上演をめぐる諸問題

### ◎オペラの邦題の変遷①《セビリアの理髪師》

初演時の題名：《Almaviva, o sia L'inutile precauzione（アルマヴィーヴァ、または無益な用心）》

最初の再演：《Il barbiere di Siviglia》 以後この題名で流布・定着した

主な邦題（過去四半世紀）：《セビリアの理髪師》（NHK、新国立劇場）

《セヴィラの理髪師》（東京オペラプロデュース）

《セヴィラの理髪師》⇒近年は《セビリアの理髪師》（藤原歌劇団）

《セヴィリアの理髪師》（旧・二期会）

《セヴィリアの理髪師》（ボローニャ歌劇場来日公演）

日本ロッシェニ協会の邦題：《セビリアの理髪師》（水谷が選択）

日本初演の邦題（1917年／大正6年）：《シキルリアの理髪師》もしくは《シキルリアの理髪師》

大正～昭和初期の主な邦題：《セビラの理髪師》《セヴィラの理髪師》《セヴィラの理髪師》《セビールの理髪師》

註：「理髪師」の代わりに「床屋」を用いる訳題もあり、実数はさらに増える。

ポーマルシェ原作劇の邦題：昭和2年『セキルの理髪師』（井上勇 訳、聚英閣）。註：作者名はボオマルセエ。

昭和13年『セヴィラの理髪師』（進藤誠一 訳、岩波文庫。後半世紀の間、この題名のまま再版。作者名は、ある段階でポーマルシェとなる。それゆえ戦中戦後の文化人は『セヴィラの理髪師』と理解していた。

**なぜ《セビリアの理髪師》なのか**——1990年頃には地名に関して原語の現地発音をカタカナに置き換えるのが合理的、という考えが識者の間に定着し、スペイン語の地名「Sevilla」も『西和中辞典』（小学館）や『コンサイス外国地名事典 改訂版』（三省堂）において「セビリア」とされた。ポーマルシェの原作も小場瀬卓三訳（手元にあるのは白水社、1977年）で『セビリアの理髪師』となり、戦前の訳題を引きずった岩波文庫も2008年の鈴木康司訳から『セビリアの理髪師』に変わった。筆者（水谷）がこれを第一に採用し、音引きを抜いた「セビリア」を二次的に採用したのも、こうした背景あつてのことである。

（日本ロッシェニ協会メールマガジン「ガゼッタ」2012年12月5日。水谷彰良・筆。一部表記を変更して引用）

### ◎オペラの邦題の変遷②《アルジェのイタリア女》

《アルジェリアのイタリア人》（日本初演）：1967年9月28日、東京藝術大学（第13回藝大オペラ公演。原語上演）

『アルジェリアのイタリア娘』（1970年刊、フランシス・トイ『ロッシェニ 生涯と芸術』（加納泰訳。音楽之友社）

《アルジェリアのイタリア女》（2番目の上演。1972年7月ステファノ・オペラ劇場公演。訳詞上演）

《アルジェのイタリア女》（3番目の上演。1976年3月に東京室内歌劇場）

僅か10年間に、アルジェリアのイタリア人⇒アルジェリアのイタリア娘⇒アルジェリアのイタリア女⇒アルジェのイタリア女

### ◎時代遅れの邦題《オリイ伯爵》 口頭で説明

### ◎日本初演のカテゴリー（ヴェルディ《リゴレット》を例に）

#### 日本初演の実像（原信子一座による「なんちゃって日本初演」）

《リゴレット》の日本初演は1918（大正7）年10月25日、駒形劇場で原信子一行が行った（題名は初演以後基本的に《リゴレット》）。これは訳詞による日本語上演で、マントヴァ公爵に予定された田谷力三が稽古中に他の団体に引き抜かれたため、座長の原信子がこれを男装して歌い演じた。その結果、原は座員の中で一番まともな女優にこれを与えたが、ジルダの登場シーンや歌をたくさんカットした（そもそも当時の上演は全幕ではなく、抄演もしくは部分上演で、歌を台詞に置き換えることも普通に行われた）。伴奏も小編成の楽団が行い、総譜ではなくピアノ伴奏譜から使える楽器に合わせて適当に音符を充てた。浅草オペラは団体や公演ごとに楽団の編成が一定でなく、少ないと5～6人、多くても10数人の規模だった。

#### 本格日本初演（露西亜大歌劇来日公演。ただしロシア語歌唱）

1919（大正8）年夏、それぞれ20人以上のソリスト、管弦楽、合唱団員とバレエ・ダンサー10名からなる「露西亜大歌劇」が初来日し、同年9月24日に横浜ゲーテ座で《リゴレット》を上演した。これは本格日本初演に当たるが、ロシア語訳で歌われた。

#### 原語による日本初演（カーピ伊太利大歌劇）

1923（大正12）年に来日した「カーピ伊太利大歌劇」はイタリア人のカルピ率いる総員約50名でソリストもイタリア人。それゆえ彼らが同年1月27日に帝国劇場で上演した《リゴレット》が原語による日本初演となる。

#### 邦人による本格初演（但し訳詞上演）

1932（昭和7）年11月5日、日比谷公会堂にてヴォーカル・フォアが行った《リゴレット》が、大規模な管弦楽の伴奏でこれを全幕上演した最初とされる。但し、これは訳詞による邦人本格初演である。

#### 邦人による本格原語初演

1935（昭和10）年10月22日、大阪朝日会館で藤原義江のグループが行った公演。

このように「日本初演」と言ってもさまざまな形態があり、《リゴレット》の場合は「ともあれ日本初演」、「原語ではないけれど実質的な本格日本初演」、「原語による本格初演」、「訳詞による邦人本格初演」、「原語による邦人本格初演」の5つのカテゴリーに区分できる。

（日本ロッシェニ協会メールマガジン「ガゼッタ」2012年2月15日。水谷彰良・筆より略記）

### ◎日本における《ランスへの旅》と海賊上演

ロッシェニ財団の研究者たちが復元した《ランスへの旅》は、1984年8月17日にROFで蘇演された。日本初演は1989年のウィーン国立歌劇場来日公演（初日は10月21日。演出：ルカ・ロンコーニ、指揮：クラウディオ・アバド）、邦人初演は2000年11月16日、日本ロッシェニ協会が設立5周年記念として行った。

蘇演25周年を記念してドイツ・ロッシェニ協会が世界の上演の調査を行い、日本については筆者が上演記録を提出。その結果はドイツ・ロッシェニ協会紀要「La Gazzetta」2009年版に「William Desniou / Reto Müller: 25 Jahre Il viaggio a Reims」として発表された。その結果、1984年から25年間に世界20か国で合計596回上演され、1989年の日本初演は10番目、日本ロッシェニ協会2000年の邦人初演は49番目のプロダクションに当たることが判った。

これとは別に「関西カゲキ派」と称するグループが、1992年にピアノ伴奏で上演したが、これは違法な海賊上演であった。

WILLIAM DESNIOU – RETO MÜLLER																					
Anzahl der Aufführungen																					
	AT	AU	BE	CA	CH	CZ	DE	DK	ES	FI	FR	GB	IL	IT	JP	MC	PL	RU	SE	US	Tot
1984														4							4
1985														6							6
1986																				6	6
1987												4								1	5
1988	7																			2	9
1989	3													5							8
1990																				3	3
1991																					0
1992							15				6		6					15	2	44	24
1993					14		6													4	24
1994							7												9		16
1995							17													2	19
1996							6													3	9
1997							4				1								17	2	24
1998							2												8		10
1999	3				9	2					2			4						6	26
2000			5		5				1		2				1					4	18
2001	15						1	9		1	1			9					1		37
2002		2		6					3					2	2						15
2003							17		12	11				4				6			50
2004							9	11	4	11				17						10	62
2005			10		9		13				4			4		4		12		5	61
2006							7		4		7			2	3			3		2	28
2007													9	2						3	14
2008							6		5		12			8	5			7			43
2009							10				17			18	3					7	55
	28	2	15	6	37	2	120	20	29	23	46	10	9	86	19	4	6	23	49	62	596

### III 協会の事業としてのロッシェニ上演データベースの構築

前記のように、日本でのロッシェニ・オペラ上演は1917年に始まり、最初の半世紀（1967年まで）は《セビーリヤの理髪師》のみが上演された。その後、さまざまな作品が日本初演されているが、限定的であるのは言うまでもない。にもかかわらず、《ランスへの旅》が証明するように、東洋における唯一本格的なロッシェニ上演の拠点が日本であり、海外歌劇団の来日を含めて演奏水準は高い。それゆえ、日本におけるロッシェニ上演のデータベースは、国際的なロッシェニ研究への貢献となりうる。

上演機会が少ないことを考えれば、諸文献から容易に情報を抽出でき、また1995年以降の上演データは文化庁の助成による『日本のオペラ年鑑』が重要な情報源となる（1995年度版、1997年発行より継続的に編纂・刊行されている。現在は文化庁委託事業として学校法人東成学園／昭和音楽大学オペラ研究所の編集・発行）。但し、ベーシックなデータベースのため、配役などの詳細は個々のプログラムや別途調査で独自に構築する必要がある。

先日開かれた日本ロッシェニ協会運営委員会において、協会の事業としてのデータベース構築が提案され、これを行うことになった。それには会員の協力が不可欠であり、次にその方法論を試案として提起し、協力者を募りたい。

#### データベース構築の方法論

##### a. 諸文献から基礎的な情報を収集し、データ化する

なにを基礎的なデータと位置づけるを明確にする（公演に関する基本的な項目を決定する）。個人でのPCへのデータ打ち込みには限界があるので、複数のメンバーの協力で行い、情報を共有しつつ誤謬をチェックする必要がある。

##### b. 上演プログラム、チラシ等の蒐集とそのPDF化

個々の上演記録を詳細に文字化するのは、aのメンバーでは不可能に近く、またタイプミスも避けられない。それゆえ詳細についてはプログラムやチラシの現物を蒐集し、これをスキャンしてデータファイル化の方が有益かつ正確となる。これにより、基礎データの項目を縮約できるメリットがあり、さらに学生公演、マイナー上演、小規模上演も対象にする。

例：日本オペラ振興会オペラ歌手育成部の修了オペラ公演、日本ロッシェニ協会や南條年章オペラ研究室のピアノ伴奏公演、音楽大学の学生有志による公演など。⇒プログラムPDF化の例

プログラムやチラシは現物を集める必要があるが、会員や公演団体から現物を借り、データファイル化の後に返却する方針が良い。将来的に歴史資料となるので、一見不要と思われる頁もれなくスキャンする必要がある（ページ数の多い場合は、必要な頁のみでも良いが、その場合は現物保存が望ましい）。

スキャンによるデータファイル化は責任者が行き、寄付された現物も同人が保管・管理する。責任者はデータファイルを基礎的なデータの打ち込み協力者と共有し、打ち込みそのものには関与しなくても良いが、基礎データとの照合は責任者が行う責務を負ってほしい。必要な場合は、現物を協会の経費で古書店から購入するものとする。

##### c. オペラ以外の重要作品とその関連資料

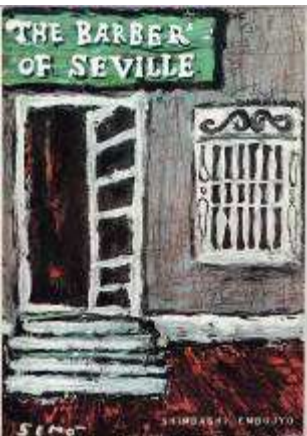
ロッシェニのオペラ作品（《小ミサ・ソレムニス》《スタバト・マーテル》ほか）、記念コンサートやシリーズ・コンサート（例：1992年の生誕200周年に国内で行われたシリーズ・コンサート、記念イベント、コンクールなど）のプログラムやチラシもデータ化の対象とする。但しオペラを優先し、当面は二次的な扱いでも良い。

d. 本年度事業としての集中的作業、データの集約と公開、海外団体への報告

これは日本ロッシーニ協会の事業として継続的に行うが、本年4月から1年間を基礎的な作業期間と位置づけ、集約された基礎データを2014年中に発行する『ロッシーニアーナ』に掲載することとする(2013年12月までの上演記録として)。これに基づいて遺漏の有無を問い、不足資料の補填を心がける。遺漏を補足したうえで、2014年以降にHPに掲載するとともに、並行して基礎情報の欧文化を行い、2017年までにロッシーニ財団とドイツ・ロッシーニ協会への正式な報告文書を作成する。

e. 協力のお願、責任者の選出など

可能なら、事業への協力者を本日の出席者から募り、本日の例会後に簡単な打ち合わせと連絡網の作成を行いたい。積極的に立案・推進してくれる人が中心人物になってほしい。また、スキャンによるデータファイル化も、当該人物が兼務してほしい(将来を考えると、責任者は若いことが望ましい)。なお、責任者と協力者には協会の経費から作業実費として一定額を支払うことも考えるが、貧乏団体ゆえ当面はボランティアとして発足したい。



# 短期特別興行

## 伊太利大歌劇

### 一行約十五名

THE GRAND ITALIAN OPERA COMPANY.  
ARTISTES  
50 FULL CHORUS AND ORCHESTRA 50  
The Biggest Combination Of Stars Ever Faced In The East.

其の来るや速に去る

好機は容易に來らず

	二十六日 全曜日 Friday 26th	アイーダ AIDA	
	二十七日 土曜日 Saturday 27th	リゴレット RIGOLETTO	
	二十八日 日曜日 Sunday 28th	トスカ LA TOSCA	
	二十九日 月曜日 Monday 29th	ラムマーモアのルチア LUCIA DE LANMERMOOR	
	三十日 火曜日 Tuesday 30th	カヴァレリア・オスチーナとパジエツチ CAVALLERIA RUSTICANA & PAGLIACCI	
	三十一日 水曜日 Wednesday 31st	假裝舞踏會 BALLO ET MACHERA	
	一日 木曜日 Thursday 1st	ファウスト FAUST	
	二日 金曜日 Friday 2nd	ノルマ NORMA	
	三日 (午後二時) 土曜日 Saturday (Matinee and night) 3rd	ラ・ボヘーム La Bohème	
	四日 (午後二時) 日曜日 Sunday (Matinee and night) 4th	セヴィラの理髮師 Il Barbiere di Siviglia	

**TICKETS. TEN NIGHTS**

Box seat ¥ 12.00 From January 26th  
1st class ¥ 10.00 To February 4th  
2nd class ¥ 7.00 Every night A17  
3rd class ¥ 5.00 Matinee (A12)  
4th class ¥ 1.50 3rd. 6th.



第一二時 入場券  
第三時 入場券  
第四時 入場券  
第五時 入場券  
第六時 入場券  
第七時 入場券  
第八時 入場券  
第九時 入場券  
第十時 入場券

帝 國 劇 場